

「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった、夜の底が白くなった」・・・実にも名文だと思う。たぶん「雪国」を読んだことのない人も知っているのではないだろうか？

もし現代的に書くならば、スキーに行く若者達が長いトンネルを通ったら真っ白な銀世界に遭遇、思わずキャホーと歓声を上げた・・・となるかもしれない。でも、「雪国」では夜だったので大地はかすかに白く漂い、ゴトゴトとあえぎながら雪の中を進む汽車の窓からもれる明かりに、線路沿いの雪だけは白く光っていたに違いない。

新幹線で湯沢の先に行ったことがあったかどうか全く覚えていないが、先日(六月中旬)長岡でクラス会があり乗車した。

「県境の長いトンネルを抜けると、そこには又長いトンネルが待っていた。そのトンネルを抜けると浦佐あたり、東京は真夏日というのに右手に見える八海山にはまだ残雪、水田の稲で昼の大地が草原に化した、しかし再び長いトンネルに入ってしまった！」

雪国上越の新幹線はトンネルが多いと聞いていたが、なるほど！ とこの歳になつて納得した。

昔通学していた頃、湯沢から長岡まで約二時間時間かかったのに、新幹線だと何と二十二分だったのにもビックリ仰天。四十七年前とこれほど違うのだと今更驚いている自分に少し恥ずかしい気がした。

四十七年ぶりに母校を訪問、建物は新しくなっており女子学生も沢山いて驚いた。私の頃女子学生は居なく、一年後輩に女子が一人入学したのが創立以来初めてのことだった。

パソコンが並ぶ現代的な教室もあるが、電磁実験室や製図室などは昔にタイムスリップしたような雰囲気です。少シショックを覚えたが、基礎学問の現場は昔も今もそれ程変わらないのかもしれない。

## 56・日本はかなしい国か？(2007.6)

新聞によると日本は長時間働く割合が高いらしい。労働基準法では週四十時間だが五十時間以上働く人が三十パーセントもいる。フランスやドイツは五パーセント程度らしい。企業がリストラで正社員を減らし、そのしわ寄せが一つの原因のようであるが、六十時間以上働いている人は十年前より相当増えているとのことである。

仕事量が多く時間内に片付かない、自分の仕事をキチンと片付けたい、仕事の性格上残業でないと出来ないこと等が残業する理由の上位三位らしいが、自分の現役時代を思い出ししてしまう。でも残業が極度に多いと、ある日突然脳や心臓の病気で過労死ということになる。昨年労災として認定した脳出血、心筋梗塞

は三百五十五件、うつ病が二百五件。いずれも過去最高とのことだ。

また平日の父親は二十三パーセントが子供とのふれ合いがないことが内閣府の調べで分かったらしい。さらに、子供の悩みや心配事を知らないと答えた父親は約七割、母親は三十四パーセント。逆に悩みや心配事を持っている子供は約六割居るとのことである。

私の現役時代も残業は多かったが、最近特に残業減らしは労使の急務のように思われる。定年後も働きたい、働きたくないが働く・・が八十五パーセントも居り、経済的理由とのことだが国民の大多数が老後に安心できないと思っている表れだと思う。現役を退いてすでに数年経つが、暗い気分ですわらずため息が出る日本の現状だ。

そこに追い討ちを掛けたのが社会保険庁の年金問題のていたらくである！ 随分昔から分かっていたことらしいが、野党やマスコミの調査、追及で公表されるに至ったようで開いた口が塞がらない。日頃、談合、天下り、税金の無駄遣いなどのニュースをきりもなく観たり読んだりしていると、日本はその程度の国なんだと哀しくなってしまう。

## 57・「しょうがない」発言 (2007.7)

政治、宗教に関することは出来るだけ書かないことにしていましたが、我慢できないので一言所感を述べます。

久間防衛相が辞任した。当然のことだ！ でも昨日までは安部首相も辞任の必要はないと明言していたが、首相のリーダーシップにもガッカリしてしまう。しかも、辞任の理由は、参議院選挙に不利になり自民党に迷惑を掛けるのを避ける為とのことであるが、違うだろう！ と怒鳴りたくなる。核廃絶は世界の責務、被爆国であり世界のリーダーであるべき日本はなおさらだ。どんな理由にしろ核兵器を使い出したら地球破滅になるだろう。「しょうがない」とは必要あれば使っても良いと言うことだろう。日本の首相がその発言者を庇っていたのである。真摯な反省も無く辞任で幕引きか？ 情けない・・世界中の笑いものだ。

「女は産む機械」「何とか還元水」の発言をした大臣連中を最後まで擁護した首相を思い出してしまふ。一体安部首相の真意は何なんだろうと思ってしまう！ それとも単純に決断が遅い、出来ない人なのかも・・。

社会保険庁の年金問題にもあきれてしまふ。野党が随分前から指摘、質問をしていたらしいが、社会が混乱するとの理由で何もアクションを取らず、ここに来て野党やメディアに追及され、国民に知れるとドタバタと言いつつ、一年でクリアーすると豪語している。まったく信用できない気分だ、不幸なことに政治を信用できない気分が昨今また強くなってしまった。

## 58・一反の「ゆかた」布地 (2007.7)

先日、妻とウインドーショッピングをしていると「ゆかた」がいっぱい並んでいました。ああ夏だ、花火だ、日本の情緒だ、綺麗だなあ・・・などが頭の中を一気にかけてめぐり、今はもう戻って来ない子供の頃の田舎、郷愁の想いになっていました。

男性の「ゆかた」は昔の雰囲気はまだある、女性の「ゆかた」はずいぶん変わったなあと思いつながら売り場に立ち止まってしまったが、ニューデザイナーが「ゆかた」を買ってもらうために今まで無かった斬新さを持ち込んだに違いない。それとも逆に昨今の女性の変化に合わせてるようにデザイン、色柄が変わってきたのかもしれない。多分両方であろうが昔の女性がタイムスリップして今の「ゆかた」売り場に遭遇したら、どんなビックリ顔をするのだろうか。1977年夏二回目のマレーシアの時、妻がおみやげに良いのではと一反の「ゆかた」布地を持たせてくれた。現地到着したその夜に早速マレーシア警察のVIPと会食が予定されており、その高級ジャパニーズレストランに「その場の雰囲気を見ながら・・・と考え「ゆかた」布地を持参した。

まだ若かった私は口ひげを蓄えたマレー系、威圧されそうな堂々たる体格のVIPと優雅な奥さんの前で緊張した。挨拶を交わしながら営業が日本の小物土産をVIPに差し出す・・・皆が笑顔である。その時私は咄嗟に「ゆかた」布地を側でニコニコしている奥様に差し出した。突然の美しい「ゆかた」布地登場でその場の皆が歓声を上げたのです。外国に来てしみじみ眺めると確かに美しい、マレーシア人にはなお更のことだっただろう。また上品な奥様に直接手渡せたからなお更である。「その場の雰囲気で・・・」がまさに百パーセントの中、ホテルに帰った後早速妻に電話をした。

「あのゆかた布地がこれ程タイミングよく、しかも重要人物の奥さんに喜んでもらえるとは予想もしてなかったよ・・・俺をはじめ同席の皆も驚いていた・・・君のアイディアに今ものすごく感謝しているよ・・・ありがとう・・・」

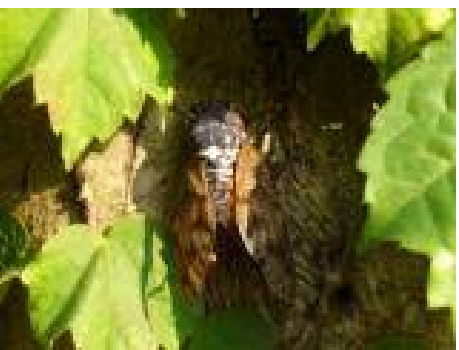
あの「ゆかた」布地はその後どうなったのだろう。壁にかかっているか額に入っているか、テーブルクロスになっているか・・・いずれにしてもマレーシアの家中で輝いているはずである。

この夏仕事で海外に出かける人は、「ゆかた」布地を持参してみてもどうでしょう。

## 59・蟬の一生 (2007.8)

ほんとに暑い夏ですねえ！ 1933（昭和八）年の記録を七十四年ぶりに更新し、観測史上最高気温を記録した所が全国で百ヶ所、四十・九℃になった所もありました。

往く夏を惜しむ風物詩である蟬の鳴き声が毎日うるさいほ  
どです。部屋の窓からふと見ると庭の木の葉に蟬の殻が鈴なり、



一体どのくらいあるのだろうと興味津々、暑い中三十分掛けて集めてみると何と百八十五個もあった、見逃しもあるだろうから二百個はありそうだ。

夕方少し元気の無い蝉が庭木に無声で居たので写真撮影、翌朝木の下を見ると地面に仰向けで息絶えていたが、この時期無数の蝉が地面に横たわっているに違いない。蝉は長年地中で暮らし地上に出て僅か一週間で死んでしまうことは昔から知っていたが、何で一週間なんだろう？何が楽しみなんだろう？この歳で改めて蝉の一生について考えてしまい、もう少し詳しく知りたくなりインターネットで検索した。実に便利な世の中である。

・二年ほど前の夜中に二時間ほど観察したことがあるが、幼虫は夜、土の中から外へ出て羽化する。その幼虫の色は真っ白だった。

・羽化後四〜五日で成熟、雄は繁殖のために鳴き、雌は交尾後に枯れ枝などに数個産卵する。

・庭の蝉はアブラセミだから翌年の梅雨頃孵化、雨の日に孵化するらしいが、これは蟻などから身を守る本能という説があるがスゴイ！ 孵化した幼虫は地面に落ちて直ちに地中にもぐり込む。

・地中の幼虫は木の根の汁を吸いながら四回脱皮し、羽化が近づくると地上近くまで移動し待機してチャンスを伺い、外気条件がそろうと地上に出て木の幹を登り羽化する。

アブラゼミやミンミンゼミは卵から成虫まで六、七年も掛かるとのことである。何でたったの一週間？何が楽しみなの？については何が出来るなかったが、こればかりは 蝉に聞いてみるしかない。いずれにしても成虫になると配偶者を探し子供を作り、生まれる前から定まっただけでどうにもならない運命に従い大往生するわけである。

人は二十年で成人、その後違いはあるが六十年（人生80年）、どうにもならない運命は実に喜怒哀楽+苦が盛り沢山です。定年後は出来ることなら気楽（喜楽）にいきたいものです。

